所報 あきた

所報あきた　113号
平成28年1月20日発行
発行所　曹洞宗秋田県宗務所
発行責任者　越姓玄悦
〒010－0812 秋田市泉三嶽根15－18
ＴＥＬ(018)868－6871
ＦＡＸ(018)868－6872
http://soto-akita.com
info@soto-akita.com
題字　能代市倫勝寺　山田晃一
写真　長野県養泰寺　内藤真彦

秋田県宗務所・禅センター
創立25周年記念号

恭賀新年

旧年中は何かとご法愛を賜りまして
誠にありがとうございました
本年も決意を新たに職員一同
業務遂行、教化活動に邁進してまいります
何卒倍旧のご厚情の程宜しくお願い申し上げます

秋田県宗務所役職員一同　九拝

第47回 秋田県宗務所檀信徒本山研修会

於：大本山永平寺　平成27年10月８日

創立25周年にあたりおことば

一塵を積む

曹洞宗秋田県宗務所 所長　越姓玄悦

管内御寺院様におかれましては恙無く新春をお迎えのことと心よりお慶び申しあげます。併せて旧年中に賜りましたご法愛とお力添えに衷心より御礼申しあげます。

昨年はいくつかの節目の邂逅の年となりました。七月には六十周年を迎えた秋田県梅花流の記念奉詠大会が秋田市文化会館にて開催され、十月二十日には大本山總持寺に於いて二祖様峨山韶碩禅師の六五〇回大遠忌が法定聚会にて厳修されました。そして十月三十日には秋田キャッスルホテルを会場に秋田県宗務所・禅センター創立二十五周年記念行事が厳かにとり行われました。

平成二年、天徳寺様より用地の提供をいただき、全国に先駆け宗務行政の拠点としての役割と、宗侶寺族の研修道場、宗門檀信徒への布教教化の場としての役割を併せ持つ宗務所・禅センターとして設立以来、昨年十一月を以って二十五周年を迎えることとなりました。設立に到るまでには様々な難問が山積し、筆舌に尽くしがたい御労苦があったことと拝察されますが、計画に関わりましたすべての方々の御尽力に心からの敬意を表するとともに、東北管区内八宗務所に限れば、すべての宗務所に於いて、現在宗務所施設を設立或いは設立準備をされているという現状を見るに、今昔の感に堪えない思いが致します。設立にあたって大英断を下し、目標に向かって邁進された関係各位の慧眼に改めて敬服する次第であります。

現在、県内の宗門に於いては豊熟の季節を迎えようとしております。布教教化につきましては特派布教師をはじめとして優秀な人材が輩出され、充実を予感させる人材がその後に続いております。梅花流につきましても特派師範はもとより将来を期待させる人材が着々と育っております。これもひとえに、設立以来の宗務所・禅センターの輝かしい成果の証左といって過言ではないと存じます。宗務所役職員の最大の責務は、これまで積み重ねられた業績に常に敬意を忘れず、伝統を絶やすことのないよう、次代のことを意識しつつ職務に精励することと、思いを新たにしたところでございます。

本年は宗務所・禅センター二十六年目、私共にとりましては任期二年目となりますが、新しいページにはまだ何も記されていません。二十五年間の輝かしい業績の上に、ほんのわずかでも積み上げることができるよう、役職員一同心を一つにして職務に取り組んで参りますので、尚一層の御指導と御鞭撻をお願い申しあげます。

最後に管内御寺院様の御法体堅固と福寿無量ならんことを心から御祈念申しあげ結びと致します。

創立25周年にあたりおことば

曹洞宗秋田県宗務所・禅センター創立二十五周年を迎えて

宗議会議員　佐々木　正悦

曹洞宗秋田県宗務所・禅センター創立二十五周年を迎え、深甚より慶祝を申し上げます。

ご周知のように全国に先駆け、いわば前代未聞の建設計画であったこの事業。後人の想像を絶する困難と苦労があったことは、想像にかたくありません。私はたまたま五年前『二十周年記念誌』編纂の仕事に携わり、当時関わった諸老師のご労苦と強い使命感を私なりに知り得た貴重な思い出があります。そんな編纂作業の中で私が気になったことがありました。それはこの建物の名称であります。「曹洞宗秋田県宗務所・禅センター」と言う名称です。「曹洞宗秋田県宗務所禅センター」ではなく、何故、宗務所と禅センターの間にナカ・（中点）があるのかということでした。文法上ナカテンは・（テン）を挟んで前後の言葉が並列を意味する記号であります。だとすれば宗務所と禅センターは並列であり、それぞれが対等にして別々の建物ということになり、この建物は「曹洞宗秋田県宗務所」と「禅センター」であるということになります。しかし建築物は一つです。（一階が宗務所、二階が禅センターと考えれば考えられないでもないのですが）

このナカテンが曖昧な時期もありました。現に建物の玄関に刻されている名称にはナカテンがありません。しかし、平成二年十二月九日に発刊された魁新報の落慶式典を祝う広告。それには太文字刷りした名称に間違いなくナカテンが付いています。

私はこの疑問について当時の所長であられた故田口清謙老師に直にお尋ねいたしました。このとき老師は四大不調の身でありましたが、当時のことを懐かしく、また熱く語ってくれました。「この建物は単に宗務行政を行うためのものだけでなく、曹洞宗の教えを世の人々に敷衍する禅の発信基地であり、拠点でなければならない。だからここが禅センターなのだ」という言葉でした。その気宇と高邁な思考に感嘆し、ナカテンの意味するところを合点した次第でありました。たかがナカテンされどナカテンなのである。

あれから二十五年、私たちは改めてナカテンの意図するところを咀嚼し、この秋田の地から禅の教えを布教発信していくという気概を奮い起こしたいものです。

ちなみに昨年、宗門は全国九ブロックの「教化センター」の名称を「禅センター」に変更することが出来ると改正しました。グローバル社会において禅は世界に通用する言葉になったからという理由でありました。二十五年前、すでに私たち秋田県の先人は「禅センター」と命名していたのである。その先見の明に脱帽低頭するのみであります。

拙い思いを吐露し創立二十五周年記念のお祝いの言葉といたします。

創立25周年にあたりおことば

『秋田県宗務所・禅センター』創立二十五周年を祝し思うこと

宗議会議員　深川典雄

教化集団としての活性化を計りつつ、常時自主研修が図られ、県下檀信徒はもとより、広く一般大衆にも門戸を開き、時代に即応した布教伝道の拠点となり得る宗務所。そして、将来に渉り布教教化活動の拠点となり得る研修道場としての意味合いを込めた趣意のもと創立された『秋田県宗務所・禅センター』が昨年二十五周年を迎えられましたこと、歴代宗務所長老師を始め歴代役職員老宗師、さらに当時建設に関わりを持たれました諸老師の感慨も一入のことと拝察し慶賀に存じ入るところであります。

折しも昨年は、大本山總持寺の二祖として、「五哲（五院）」あるいは「二十五哲」と称される多くの優れた門弟を育成。さらに、その門弟が協力し合い、總持寺を維持発展させるために「輪住制」を確立するなど、七百年近くも前に、既に「人材育成」と「教団の将来ビジョン」に深い思いをもち、ただひたすらに總持寺の住職として四十二年間勤め、曹洞宗の教えを全国に展開する基盤を形成された、峨山韶碩禅師六百五十回大遠忌の御年でもありました。

今将に二十五年の節目を終えた今日、私共世代が肝に銘じなければならないことは、高祖道元禅師が伝東された正伝の仏法が、太祖瑩山禅師に綿密に相承され、そして、峨山禅師が瑩山禅師から相承された正伝のみ教えが脈々とわれわれのもとに受け継がれて来ているように、『秋田県宗務所・禅センター』の創立時の趣意を決して忘却させることなく、将来に渉ってその根底にある精神をいかにして次世代に相承させて行くかということであると思います。

創立25周年にあたりおことば

創立二十五周年に思う

所会議長　嵯峨宗一

新春を寿ぎ、今年も諸老師におかれましては萬福多幸の年でありますことを祈念申し上げます。宗務所・禅センターも関係諸老師の相続し維持する事を主中の主とした献身の甲斐あって創立二十五周年を迎え、記念集会を賑々しく開催出来ましたことと心より祝意を表したいと思います。私事になりますが記念すべき年に住職永年勤続の表彰の栄に浴し感激した次第です。建設当時の必要性を訴える人は沢山いたようですがデスクプランだけで進むものでもなし、特に金銭面において関係者の努力は大変だったと聞いております。全面的に賛同を得、竣成に漕ぎ着けましたが至難の大事業だった事は誰しも認めている事と思います。今我々は当然のことのように使用しているが、改めて井戸を掘り後人に恵みの水を与えてくれた方々の労苦を忘れてはいけないと肝に銘じているところです。

話は変わるがある機関誌に「子供が育つには二つの大人の対応が必要である。一つは善悪のけじめを教える学校の先生タイプ。もう一つは善悪はさておき、生きるために必要な世間知を伝える地域のおじさんおばさんタイプ」と載っていた。僧侶は幅広い年齢層と接し布教の中で正しい生き方を説き、檀家の人方の話し相手となり世間知も伝えるどちらのタイプにも属する。禅センターはその活動の拠点となり活性化させる場所の一つでなければならない。全国的にあまり類を見ない恵まれた禅の拠点を誇りに思い、寺院、在家、老若男女を問わず最大限に活用することが東奔西走した先輩方への何よりの恩返しではないだろうか。地方創生が叫ばれている中、地方の人材育成の一端を担うことも我々の大きな役目であり、課せられた使命ではなかろうかと思います。今後も禅の敷衍の場としては勿論の事、各社会と連携をとりながら「協育」（他県の造語を拝借）の舞台となることを冀うものです。

創立25周年にあたりおことば

禅センターへの提言

元所長　亀谷健樹

早いもので宗務所創立25周年という。全国にさきがけての宗務所・禅センター発足当時、諸老師のご苦心、ご難儀は計り知れないものがあろう。その遺志を引き継いだ関係者の尽きせぬ精進力によって、宗門では類をみない業績を積みあげた。本県は宗務行政のみならず布教教化においても、卓越したレベルである事は論をまたない。

ところで今回は、わが禅センターの内容をより豊かにする為に、また四半世紀の新たな出発に当り、日頃考えている事や希望の一端を、率直に述べるのをお許しいただきたい。

㈠　秋田県曹洞宗寺院大会の開催。昨今県内での葬儀法事の在り方が、急変している。葬祭センターなどの事業拡大のあおりを受け、菩提寺の役割がせばめられている。このまま等閑視していいだろうか。この際、現状把握と対策を全県的に協議する必要があろう。早急に寺院研修大会を開催するよう提案したい。

㈡　宗憲に〈只管打坐、即身是佛を承当する〉とある。現在どれ程の宗侶が暁天打坐しておるだろうか。僧俗共に初心に返り菩提心を起さねばならぬ。その手本として禅センターでも、定期的な「参禅会」をぜひ復活されたい。

㈢　葬式、法事の際には必ず短い法話をする。側聞すると県内で法話する宗侶は、少数派のようだ。折角の教化のチャンスが失われている。短くとも聴聞者の心に届くお話を心掛けたい。

現在、禅センターでは「布教師養成講座」を開催。また「布教師の会」でも随時法話の研修を実施している。だが教化意欲が無ければ、絵に描いた餅になってしまう。宗侶自身が問題意識を持ってほしいと、痛切に思う。

㈣　禅センターは、県内寺院の情報交換の場でありたい。一例を挙げれば、各寺の寺報や文書伝道を持ちより、その研究機関を設けたらどうだろう。それぞれ参考になる点が多く有益であろう。つまり寺報のネットワーク作りだ。禅センターに於いて、是非その機構づくりに着手してほしい。

以上、忌憚なく申しのべたが、この中のどれかひとつでも企画実現されたら、混迷する現状を打開する手立てになるのではないか。みなさんのご意見をお聴きしたい。

創立25周年にあたりおことば

禅センター二十五周年に寄せて
―人の持ち味について―

元所長　清水忠道

禅センター二十五周年の節目にあたり、当時のご苦労なさいました関係の皆様に思いを寄せ、感謝致します。

良縁を得て宗務所に身を置き、二十年お世話になりましたが、この度の記念日には、入院を余儀なくされ、やむをえず病室より越姓所長のご労苦を思いながら、盛会裡に終えられることを願っておりました。

病院では、毎朝、主治医初め二人の医師が交互に回診に来てくれ、その時にかけられる言葉が、感じられる優しさが、笑顔が、病人の私に安心を与えてくれました。看護婦さんたちも同じように心の不安を和らげてくれ、配慮は細やかで、患者さんを檀家さんに置き換えてみると、見習いたいと思うことが多くありました。

また、時折立正佼成会の信者さんたちが大仏様を参詣にまいりますが、どういうきっかけで入会されたかと尋ねると、お寺に行ってもなかなか会話ができないが、会の仲間とは会話ができる、話をよく聞いてくれるなどということでした。

菩提寺の和尚さんは多忙のようで、たとえば、葬儀はなぜ必要か、お経の意味、戒名の意味など、きいてみたいけれどもできない――。

けれども、和尚さんには、話し合う機会が結構あるのではないでしょうか。葬儀後の供養時にしても、ご法事の後のいっときの茶話会にしても、たいそうな時間もいらず、構えもいりません。和尚さんには、みんなそれぞれの持ち味があり、気軽に語り合うのも布教の一端ではないかと。お寺のたたずまいにしても、堂内の清掃にしても、和尚さんの振るまいすべてが布教の一助と思われます。

「真っ直ぐな道では寂しい」とか「みんな違ってみんないい」とかことばもあります。

ここ数年後に、都心部から離れた限界集落候補地は多くなり、実をなさない状況に向かっています。今後、どのような状況になろうとも、受け継いだお寺は維持し運営しなければなりませんが、葬祭においても、人と接する時、僧侶の役割は大きく、その人の持ち味が、誠意が、優しさが、お寺を支える要因になるのではないでしょうか。

禅センターを拠点として、それぞれの持ち味を十分に発揮し、宗門を支え、活躍されることを願ってやみません。

平成27年度曹洞宗秋田県宗務所・禅センター創立25周年記念式典

この度、秋田県宗務所・禅センター創立25周年記念式典等が、十月三十日、秋田キャッスルホテルを会場に盛大に開催された。

第一部は記念講演として、午後一時三十分より「仏教が示す救いの道」と題して花園大学文学部教授、佐々木閑先生を講師にお迎えし記念講演が開催された。二〇〇名ほどの聴衆が熱心に講演に耳を傾けていた。

講演終了後は会場を移し、住職永年勤続表彰受彰者をはじめとし、関係各位多数御臨席のもと午後三時四〇分より記念式典が行われた。

越姓玄悦所長の式辞に続き、二十五周年という節目の年を迎え、歴代所長としてご功績のあった元所長、清水忠道老師（正法院前住職）と前所長、佐々木正悦老師（満勝寺住職）のお二人に感謝状の贈呈があった。

その後、住職永年勤続五〇年、四〇年、三〇年表彰を受けた諸老師の紹介と彰状の授与、寺族として長年に亘り住職を補佐してこられ、七〇歳、六〇歳を迎えられた方々への彰状の授与が行われ、受彰された方々を代表して、第十六教区西光寺住職、嵯峨宗一老師が謝辞を述べられた。その後、元宗務所長、亀谷健樹老師より受彰された方々へ御祝辞が述べられた。

記念式典終了後会場を移し、午後四時二〇分より祝賀会に移り、主催者を代表して斎藤昭道副所長が開式の挨拶をし、満勝寺住職、佐々木正悦宗議会議員老師より御祝辞をいただき、嵯峨宗一所会議長の乾杯の発声にて、和やかな祝賀会の開幕となった。

――次　第――

第１部　記念講演（午後１時30分～）

「仏教が示す救いの道」

花園大学文学部教授　佐々木　閑 先生

第２部　式典（午後３時40分～）

１．式　辞	宗務所長	越姓　玄悦
２．感謝状贈呈	元宗務所長	清水　忠道 様
	前宗務所長	佐々木正悦 様
３．表彰状授与	住職永年勤続・寺族表彰	
４．謝　辞		嵯峨　宗一 様
５．祝　辞	元宗務所長	亀谷　健樹 様

第３部　祝賀会（午後４時20分～）

１．あいさつ	副所長	斎藤　昭道
２．祝　辞	宗議会議員	佐々木正悦 様
３．乾　杯	所会議長	嵯峨　宗一 様
４．閉会の辞	所会副議長	藤原　徳義 様

表彰対象者芳名簿

感謝状

第10教区　清水　忠道師（元宗務所長）

第7教区　佐々木正悦師（前宗務所長）

住職50年表彰

第1教区　闔信寺　明石　徹延師

第1教区　長泉寺　田口　義典師

第3教区　寶圓寺　鷹照　俊一師

第16教区　西光寺　嵯峨　宗一師

住職40年表彰

第16教区　永蔵寺　戸部　英二師

住職30年表彰

第3教区　慈音寺　宮本　康博師

第3教区　龍源寺　土谷　真雄師

第8教区　東光院　遠藤　正幸師

第9教区　海蔵寺　伊藤　良弘師

第12教区　瑞光寺　加藤　龍雲師

第15教区　宝泉寺　島　正恵師

第17教区　長福寺　木村　佑哉師

寺族表彰

第2教区　東泉寺　柴田　道子様

第3教区　泉流寺　佐藤　千里様

第4教区　西林寺　金子　幸子様

第4教区　楢淵寺　佐藤さとみ様

第4教区　太平寺　三嶋　綾子様

第5教区　龍泉寺　村田磨理子様

第9教区　梅林寺　木村満寿子様

第11教区　龍江寺　沼澤　安子様

第13教区　洞泉寺　小嶋　優子様

第13教区　本明寺　櫻田　博子様

第14教区　萬照寺　八島　恵子様

第16教区　圓能寺　高野タエ子様

記念講演会の様子

越姓玄悦宗務所長の挨拶

佐々木閑花園大学教授の記念講演

聞き入る聴衆

熱心に講演を聞く

熱弁される佐々木先生

記念祝賀会の様子

主催者挨拶・斎藤昭道副所長

祝辞・佐々木正悦宗議

乾杯・嵯峨宗一所会議長

懇親会風景

懇親会風景

本山研修会

本山研修に参加して

十教区正法院檀信徒参加者一同

始めに。今回の本山研修についての原稿の依頼をお受けし、一個人の手記ではなく、参加者全員の思いや心に残った事を出し合い、集約する事にした。

以下、平成二十七年十月十七日、正法院において。

十月七日、朝早くから出発した本山と京都、加賀の旅。永平寺に到着し、何百年という杉の木を見ると自然に身が引き締まる。朝の暗いうちから始まる坐禅。法堂でのお勤めが終わる頃には、外が明るくなり心が洗われる気がした。

初めて参加した時は、杉の木の大きさや建物に目を奪われ、ただただ迫力に圧倒され、他のものに意識を向ける事が出来なかった。今回は二回目。少し慣れた趣で、布教部長様の法話も興味を持って聞く事が出来、特に、じゃんけんでわざと負ける事の難しさ、転じては我を押し殺し、譲る事の大切さを知った。

坐禅では、普段は聞き流す程度であった事前説明も、緊張の中では集中して聞く事ができ、耳にとまる言葉が多く、引き締まった心で坐禅に望む事が出来た。また警策も、肩を叩くのではなく、姿勢を正す事に特化して下さったのは有難く感じた。

映像にて修行の許しを乞う山門より、一年間の雲水さんの修行を垣間見る事が出来きたのは良い経験となった。

宿泊のお世話をして下さった雲水さんは、とても丁寧に接してくれ、気持ち良く過ごす事が出来た。しかし何度か参加しているが、専門的な用語はやはり耳慣れないものがあった。

可能であれば、他の観光を省いても、寂光苑など永平寺の境内をゆっくり巡りたいものだと思った。

最後に、全日程、天気に恵まれとても有意義なバスの旅であった。

詠　永平寺　　成田友世

秋気澄む　肩をゆすって　坐禅解く
叉手の胸　抑え読経の　さやけさに
山門を　背にして撮られ　九月尽

十教区正法院檀信徒参加者一同
合掌

永平寺本山研修に参加して

秋田市補陀寺檀信徒
犬上篤、綾子

平成二十七年十月七日から三泊四日の行程で大本山永平寺で研修会が行われ、初めて参加させていただきました。仕事柄平日休むことはなかなか難しいのですが、妻から是非行こうと言われ遅い夏休みをとることにしました。以前、補陀寺の阿部住職を總持寺へお迎えに行ったとき研修を受けたことが有り、なんとなく研修について記憶が残っていました。

三号車は朝の通勤ラッシュで秋田市を抜けるのに大幅に遅れて、象潟の道の駅では到着と同時に一、二号車は先に出発してしまいました。途中で、一、二号車に追い付きましたが北陸道で夕方のラッシュに巻き込まれ永平寺には遅れて到着し、暗くなってしまいました。開講式を終え、薬石をいただき、時間が押していたため、夜座はなく法話を聞き、

映画を鑑賞してから就寝しました。「はきものをそろえる」という法話は感銘しました。簡単なことであるが気が付きにくい心得ですがすぐに実践出来そうなので帰ってきてから心がけるようにしています。

お酒を飲まずに二十一時に眠れるかなと思っていましたが、バスでの長旅の疲れで熟睡し三時前には目が覚めました。朝の座禅に始まり、行事を終了し下山いたしました。この研修が自分の一つの修行と捉え、自分を律すべきなのでしょうが初めての経験で、まだまだその域には達しませんでした。

二日目は京都太秦映画村、京都文化博物館を見学してホテル東山閣宿

泊しました。一日の禁酒明けのビールは格別でした。

三日目は臨済宗妙心寺、真言宗仁和寺、大覚寺を見学しました。どのお寺さんも大きく格式があり、大学生のとき回った奈良のお寺さんとは雰囲気が違いました。夜は山代温泉の瑠璃光に宿泊し、贅沢な一泊をさせていただきました。

来年も参加できたらもう少し自分を見つめ直すことが出来るかもしれません。タイトスケジュールの研修旅行でしたが、ビーエス観光の方、青森の北都観光バスのガイドさんのおかげで、楽しい研修旅行でした。どうもありがとうございました。

本山研修会に参加して

大仙市　満勝寺檀信徒
佐藤　一夫

平成二十七年十月七日㈬～十日㈯三泊四日の日程で開催された、曹洞宗秋田県宗務所第四十七回檀信徒本山研修会に初めて参加させていただきました。

大本山永平寺に於いて体験させていただいた一宿二飯の生活（修行）は、忘れることの出来ない貴重な人生の一ページとなりました。特に、翌朝三時四十分から行なわれた坐禅は、セロトニンレベルの調整がなされ脳波が安定する研究成果のお話もあり、「坐禅が悟り」であることが少し理解出来たような気が致しました。

また、宮崎奕保永平寺元貫首の教えとして、生物のみならず、スリッパや線等全ての物が成仏出来る行ないが大事であることを紹介していただきました。このことは、小生の目から鱗が落ち、物への接し方が変わりました。

今年は戦後七十年でもあり、我が家に於いてもニューギニアにて戦死した祖先を、大法堂にて供養していただき心が安らぎました。

「永平寺の一年」と題したＤＶＤも鑑賞し、雲水の厳しい修行を目にした時、自分の日常生活はぬるま湯に浸っていることを痛感しました。

そして、叉手の意味・仕方についてや、「怠らずに努めよ」をお釈迦様の遺言と捉え精進出来ることも学ばせていただき、生きてる限り修行であることを思い知った。

永平寺下山後は、道元禅師様が目にしたであろう京都の寺院や風景を同じく目にすることが出来、感銘を受けながら研修しました。その夜は、参加者全員にて懇親会を開催し親しく交流した後、折角の京都でしたので、縁あって同部屋となった知人と二人で祇園へ繰り出し、牛乳で温めたとてつもなく美味しい湯豆腐を食べながら祇園の夜を楽しんだ。

最後の夜は、山代温泉にて参加者と懇親を重ねた後、同部屋となった同志との会話に花が咲き、何故か禅と梅花の大会で学んだ「大空という一つ屋根の下の、大地という一つ床の上に住む兄弟じゃないか」という言葉を思い出し、少しは理解出来たような気がした。

今研修会で出会った皆様とは、道元禅師様のお導きかと思える程、並々ならぬ縁を感じ取ることが出来ました。

このような素晴らしい研修会を企画して下さった、秋田県宗務所越姓所長初め関係者の皆様に、心から敬意と感謝を申し上げます。

今後、曹洞宗秋田県宗務所の益々の御活躍と、今研修会が末永く実施されますようお祈り致します。

また笑顔で会える日を楽しみに致しております。

お世話になり、本当に有難うございました。

合掌

表紙の言葉

題名「瑞雲輝く」

撮影日　平成27年２月９日

厳寒の時節、梅樹も凍る。上空の気流は激しく、雲はたちまちにその姿を遷してゆく。彩雲もまた現れては消え、形を留めない。五色から五雲とも、さらに景雲・慶雲・瑞雲・紫雲とも呼び、吉祥の兆しとされる。

人権コーナー

平成27年9月30日～10月2日の日程で全国人権擁護推進主事研修会が東京グランドホテルを会場にして、「身元調査について考える～過去帳の取扱いに関する諸課題から～」をテーマに開催されました。

初日は、人権推進本部よりこれまでの実例をもとに、身元調査の状況と問題提起がありました。「被差別部落でない」証明としての「家系図」を作成して事例、『家庭訓』の中にある封建的な差別意識「血統尊重・結婚粛正」についての考察、「栃木県宗務所持院住職差別発言事件」の状況と分析・そこから見えてきた宗門の課題、社会に様々な偏見・迷信が蔓延している状況と差別意識の関連など、各事例の背景・問題点が報告されました。「今日現在も変われない」状況を「生まれによって差別されない」ように「日常的な課題」として取り組み、電話や訪問による巧妙な問い合わせが私たちの身の回りで行われている事を認識し、知らない内に「身元調査」への協力をしないようにとの注意喚起がありました。

翌日は、熊本県泰巌寺住職磯田浩隆人権啓発相談員より「僧侶であるがゆえみの人権啓発」と題して、狭山事件の取り組みや発表者の体験談から「被差別部落」の方への社会差別の内容が語られました。次に、明治大学圭室文雄先生から「檀家制度の成立と展開～過去帳の成立について～」歴史を紐解きながらご教授いただきました。過去帳の起源・墓石に成立・「生類哀れみの令」以降に始まる差別の事例・差別戒名の具体的な内容をご説明くださいました。

最終日は、パネルディスカッションが行われ、参加者より様々な質問がありパネラーの相談員より体験を通したアドバイスがありした。研修会のテーマに関しては「宗教法人の約束事」として、部落差別に利用されない為にも「寺院過去帳」他、檀信徒の個人情報に関連した各種名簿の取扱いは、「開示をしない」ことを再確認致しました。

また、11月16～17日に山形県鶴岡市善寶寺様において、東北管区で初めての「被差別戒名物故者諸精霊追善法要」と「曹洞宗東北管区・人権擁護推進本部共催管区内宗議・宗務所・教化センター役職員等啓発研修会」が併修されました。

法要の導師は、宗務総長がおつとめになり、参加者全員でご供養をさせていただきました。

初日は、『「同和対策審議会」答申50年、その意義と今後の課題』と題して西嶋藤彦部落解放同盟中央本部執行部長より講演があり、「檀家をよそおって過去帳を調べる事件がいまだにある。そこに差別添え書きがあることもこの間明らかになった。私たちは、全日仏へ過去帳の完全封鎖をお願いしてきたが、守られていない状況がまだ存在する。本音のところでの差別意識を克服する為に、宗教者の役割はますます重要になってきている。」と述べられました。

西嶋藤彦氏

宗務総長

翌日は、和田献一部落解放同盟栃木県連合会執行委員長より「東北の被差別部落の現状と課題」について、歴史的な資料と現状を話され、「『マイノリティ＝社会的少数者』の人権を保障する国際的な基準を学び実現させる必要がある」と提起されました。

中西和久氏

和田献一氏

続いて、俳優の中西和久氏より「芸能と差別」題した講演があり、氏の自身の「差別と戦ってきた」自分史が語られました。

以上、今後も学習を深め、皆様にお伝えしてまいりたいと思います。

（人権擁護推進主事　佐藤徳祐）

禅センターコーナー

仏教講座

「平成二十七年度仏教講座」に参加して

齊藤　晋作

一、「語るも修行」「聴くも修行」

比較的若い僧の五分講話、僅か五分の講話ではあるが、自らの体験を聴く者が分かり易い様に何十倍もの時間を要して勉強、準備をしてきたとみえ、小さな出来事の体験談ではあるがどのお話も奥深いものでした。聴講者の方向を向いていると感心しました。

聴く側は自らの体験と重ね合わせて聴講するともっと理解が深まりますし、そうすべきです。

二、経験の深い指導的立場の方丈さんの講義

一般には仏教といえば「死後」とか「仏様、ご先祖様にお頼み」という観念があるが、いろんな講師の講義を拝聴して共通することは死後とか仏様、ご先祖様云々というお話は殆どありませんでした。99％は今、生きている私達を主人公にしたお話でした。まさに私達曹洞宗檀信徒の偉大な教本である「修証義」の教えだった様に思えます。ここに実践的な仏教の大義があるのだということを講師の皆さんは仰りたかったのではと思います。一例ではありますが、「修証義」の一節に三聚浄戒十重禁戒の教えがあります。一億二千万の日本人の内一体何人の人間が胸をはって実践していると言えるでしょうか。勿論それに一歩でも近づこうと心がけている人は沢山いるとは思います。が、多くの人は想いを遂げられないままにこの世におさらばするのが現実なのかもしれません。

三、課題

若い僧の皆さんが五分の講話のために数十倍の勉強、準備をし、経験豊富な方丈さん達が論理的にさらに深く追求した講話を一口で言うならば、全ての事象、全ての生命体は何らかの繋がりをもっているということでしょうか。地球の誕生以来、全ての生命体が今、生きている自分の命を形づくっているという法を学びなさいと教えているのだと思います。ですから「語るも修行」「聴くも修行」これは死を迎える瞬間まで持ち続けなければならないと教えて頂きました。さらに実践を伴うことこそが重要であることを教えて頂きました。

合掌

布教部員として

佐々木耕志

布教部員を委嘱されてから、この春で三期丸六年が経つ。役が当たっている回に出るだけで精一杯なのが本音であり、公開講座も野外研修も未経験な私が記せる感想は限られるが、まずは法話実演で得られたものから述べてみたい。

私は令命二等布教師受験の際に学んだ他、檀信徒に仏事の意義を話すようにしており、法話の組み立て方と話す事自体には慣れていた。しかし〝自分の知らないうちに独りよがりな法話になっているのでは…〟という不安は常にあった。その点、布教部での法話実演は、経験豊富な老師達に講評を頂けるので有難い。また、佛教講座での実演は、多くの一般受講者が聴いて下さる。以前実演した際、ある法話集を参考にしたのだが、自分でもよく理解できない部分をそのまま述べたところ、ある受講者が苦笑しながら首を傾げていた。自分の未熟さを思い知らされると同時に、〝次回は大きく頷いてもらえる法話をしよう〟と決意できた。今年度は、富山県林洞寺御住職・

倉田豊彰師の御講評が貴重だった。私は年忌法要の際の法話という設定をしたが、〝どんなケースでも当てはまる法話にしよう〟と思うあまり、故人の言葉・思い出・遺してくれたもの等を全て省いてしまった。論旨の一貫性は評価されたものの、〝《情》の部分が足りず、他人事のようにも聞こえる。《法》の受け皿に《情》をバランスよく盛る事が重要》と御指摘を頂いた。今後に生かしていきたい。

また、佛教講座での茶話会も勉強になっている。受講者の動機・環境・性格は十人十色で、部員にはいわば《フリートークの司会者》と《インタビュアー》の能力が求められる。皆が黙りこくってしまう場面もあり、ある意味で法話発表よりも難しいと感じる。ただ、間違いなく経験に比例して上達するので、まずは場数を踏む事に努めたい。

三十名を超える布教部の一員として、部員から学ぶばかりでなく、部員から参考にしてもらえるような法話・茶話会司会が出来るように、これからも精進していきたい。

野外研修

仏教講座の野外研修に参加して

太平寺　工藤　久夫

平成二十七年度仏教講座・野外研修に参加させて頂きありがとうございました。私、梅花を習い始めてまもなく十五年目となります。社会人現役当時より両親はもちろん旧町内に住む叔父・叔母が一人もいなくなった時でした。最後の叔母の葬儀の日に住職様に梅花はありがたい物で、良いですね。心のこもった歌詞、音色、心が癒やされます。檀信徒でもない無縁の私でも入れるものですか、と尋ねると「どうぞお入り下さい」と歓迎されました。練習日当日恐る恐る境内に入り皆様方の前で住職様より御紹介を受けました。

あれから十五年、仏教、梅花、何も解らぬまま入講。練習を重ねる中で住職様からの歌詞解説、楽譜の読み方、お経の解説等、色々勉強させて頂きました。心の寂しさがあったのか、自分では気付かずに居たが、私の父も仏心が強かったことは子供の頃よく聞いたり、見たりした記憶があります。今年、春四十年の結婚記念に長年連れ添った妻に先立たれ、何事も手に付かず、心の隅に穴が開いた様な状態でぼんやり生活が続きました。我家の初仏となり、お墓等仏具一式、全て揃えなければなりませんでした。

六年前、私、受戒を受け生前戒名を頂きました。妻の供養と自分の心の支えとなる様仏壇に向かい毎朝、お経を唱えてから、未だ、会社に出社しています。研修日に合わせ、一ヶ月半も前から会社に休暇届けを提出し許可を頂き参加させて頂きました。

禅センター八時半集合とのことで、早朝、自宅を出発、一人ドライブ中、今日の天気を気にしつつ一時間十五分で到着。受付を済ませ迎えのバスに乗車、皆様方、昨日何か良い事したのか、天候に恵まれ、秋田の晩秋の行楽日和となりました。参加者総勢二十六名で目的地、男鹿へと向かいました。

途中、男鹿半島入口、観光案内所前では、見事に背の高い「ナマハゲ」の立像がお出向かえ、もうすぐ大龍寺に到着とのこと。到着するも、最初に、私の面長な顔と細目に映ったのは本堂前の手入れの良い庭園、大きな庭石三個、点在し、一つ一つに一文字が刻まれた仏法僧、一つ一つの石碑に合掌、中に入り御案内して頂いた住職様、笑いを入れての説明、龍王殿から眺める日本海、お茶を一服しながらの楽水亭から観る紅葉がすばらしく、大正時代の感動を少しだけ共有いたしました。

一時間程の滞在でしたが参加者からはお昼まで居ようよとの声まで聞えるも次の祥雲寺へと向かいました。着くもびっくり、階段参道皆様、若くない人達ばかり、ゆっくり登り境内へ。色々説明を受け、帰りには手土産まで頂き持ち帰りました。

いよいよお昼です。どんな料理か期待し磯の家へ。お腹を空かし、出て来たお膳はこれまたびっくり、品数の多さ、食べきれない程の量を頂きました。

やっぱり多かった御飯を頂き午後は潟上市天王、自性院を訪れ、色々

境内の説明を伺いました。特に私が気に入ったのは坐禅堂「ただ座るだけ」以前には坐禅も行いました。あんな道場での坐禅は背筋も伸び、無に入れると確信いたしました。外に出て、門前から本堂を観ると参道両脇に生える黒松の列がとても印象的でした。

こうして参加して見ますと、各寺院の宝物、歴史に触れることが出来、今、一度一品一品、心を持ってゆっくり拝観したいものです。これからも梅花、仏道に精進し、妻の供養と自身の体が続くかぎり、梅花仲間、講座仲間を大切にし続けてまいりたいものです。スタッフの皆様方の御苦労を心より感謝いたします。

仏教講座の野外研修に参加して

菅原フサ子

昨年から参加させて頂いていますが二年連続の日本晴れに恵まれ、なんと日頃の精進の賜物かと家族に褒められ出かけました。「和尚さんとお寺巡り、一日限定の旅」と自分なりにタイトルを決め、異空間と新発見のできた貴重な楽しい一日でした。同乗した和尚さん達の会話がラジオのスイッチをオンになったようで黙って聴いていて楽しかったです。数年前につつじの季節に拝観した大龍寺様、四季おりおりの絶景が想像されますが、今回は龍王殿から眺める紅葉に感激、御住職様の案内も時間が足りなくまたの機会に是非、拝観したいと思っています。

高台にある祥雲寺様は、講座でお目にかかる和尚さんで親しみがありました。後継ぎの息子さんが和尚さんの後ろを着いて歩く姿が印象的でした。深呼吸をして男鹿の空気を思いっきり感じて来ました。

そしてお昼、「磯の家」様、男鹿の海鮮料理を満腹。さて、きょうの参加費で間に合うのかな?と心配。そばにいた和尚さんにおそるおそる聞いてみたら「大丈夫ですョ安心して下さい!!」との事、ホッとして至福の一時でした。ごちそう様でした。

ピカピカに光る渚を背にバスは一路、三番目の訪問地、自性院様へ。御住職は質素な建築と説明されましたが、重厚な造りと歴史、随所に匠の技が有る厳かさを感じて来ました。

どのお寺様も「相承」を感じさせられ、心暖まる御案内と御接待に感謝と御礼を申し上げます。帰路はみなさん、笑顔でまたのお目文字を楽しみに解散しました。宗務所のみなさま、有難うございました。

公開講座

佐々木閑先生の記念講演を聴いて

14教区　耕伝寺徒弟　砂川　文佳

昨年度につづき、佐々木閑先生の講演を聴講させていただきました。前回は仏教が成立し広く信仰されるようになった時代的・社会的背景について多くの時間をさいてお話しいただいたように記憶しております。今回は先生ご自身が仰っていたように、そこから更に踏み込んだ内容となりました。

配布された資料は、一般の信者さんにとって難解とおもわれる部分もありましたが、実際にはそのような心配もなく、非常に理解しやすい内容でありました。曖昧な言葉を避け、徹底して論理的に進められる話には説得力があり納得させられました。また、科学的な見方を持って仏教を捉える点は京大工学部卒という土台を持つ佐々木先生なればこそといった印象も持ちました。

科学が発達し、他の宗教が想定するような絶対者の存在を信じることが難しくなっている今こそ、仏教の有効性が顕在化し、合理的な現代人の志向に沿っていくとする先生の見解は、信仰に対する意識が変化していくなかにあって、われわれ宗侶が布教をするうえでの大きな示唆をくださったと思っております。

一方で、ご自身の経験された挫折や困難、きわめてプライベートな話題にも触れられ、先生のお人柄が伝わってくるお話しもありました。時折ユーモアをまじえながら、和やかな雰囲気の会場のなかで、私は先生が以前新聞のコラムで述べられたことを思い出しておりました。

「釈迦の教えを人に伝えるための言葉は、必ず穏やかで理を尽くしたものでなければならない。仏教を伝える場合には、『正しいこと』を、『正しいかたち』で語ってはじめて正当性が認められるのである」と。

しかし、これは話の内容や話し方のことだけを言ってるのではない。伝える人がどういった生き方をしているのかが問題なのだよ。

我々に対して、そう問いかけているように感じられる講演でもありました。

合掌

妄言風発

この紙面は皆様の思惑を掲載するフリーページです

―三教区の皆さまの声―

少子化の果てに

蔵堅寺　門脇　真海

秋田に来て早八回目の新年を迎えた。ということは除雪もシーズン８に突入したということである。拙寺がある由利本荘市の市街地は、県内の他の地域に較べれば、はるかに積雪が少ない地域ではあるが、温暖な地方に生まれ育った者には除雪の苦労が身にしみる。とは言え、いつ入るか分らない葬儀の為に境内の駐車場は常に確保しておかねばならない。ぼやきながらの作務も慣れと諦めと体力作りの一環と受け入れている。

さて、ここ数年檀務を通じて強く感じることは、なんと言っても非婚化と働き手の流出である。現状のままでは当然ながら、寺の二十年後三十年後は悲観的である。積年の少子化が大きく影響していることは明らかである。人口が減れば地域は衰退し、雇用を生む民間企業は撤退または淘汰される。そして益々出口の見えない負のスパイラルの真っ只中にいるのが、今の日本であり秋田である。成熟した先進国の日本では仕方のない現象ではあろうが、ペースの早さは世界一である。そのペースに迫るのが東アジアの国々だそうだ。これは自分達が育ってきた生活レベルと同等以上のものを我が子にも与えたいという国民性が、大きく関与しているらしい。確かに自分のことを考えればあてはまる。自分は三人兄弟の真ん中の長男であるが、自分の家には二人の娘だけである。会社員時代に三人目は、男の子は、欲しくないのかと聞かれても、生活出来なくなるから諦めていたものだ。子供一人を養育するのに掛かる費用が昔に比べて増大し、また雇用環境の不安定化、給与が右肩上がりにならない現状では、結婚しても一人か二人の子供で十分となってしまう。少子化対策は壮大な事業だが、子育てのコストが下がれば子供は増えるはずなのだが。

その前の段階で大きな壁がある。結婚すればまだ良いのだが、わが檀家さんのところにも沢山の独身者がいる。これも少子化ゆえに出会いが少ないからなのか、雇用と給与の問題で結婚に踏み切れないのか、親と同居のほうが居心地がいいのか、コンビニとコインランドリーが充実しているから独りで暮らしていかれるからなのか、あれこれ考えてもその立場にいない拙僧には想像できないのである。しかしながら、年を重ねるにつれて独りでいることが寂しく感じると思う。結婚に踏み切れなくてもパートナーはいたほうが良い。という思いで一昨年より、初めは坐禅Ｄｅ合コンを単独で開催し、二回目は近隣有志ご寺院様と共同でコンサートと合コンを開いた。……が二回とも想定以下の参加者であった。反省点を精査し参加者を増やす知恵をしぼり、継続していきたいものだが、拙寺に限らない問題であろうから、宗務所または教区の行事として一考いただければと思う。

少子化から連想せざるをえない寺院消滅を食い止める、または、その過程を出来る限り先延す為にも、やる事はたくさんある。雪にくじけてはいられない。

地獄に仏はいた

松林寺　高橋　渓林

それは雨の夜だった。行けども行けども、目的地に着かない。やがて行き先を失う。まるで、くもの巣にひっかかった虫だ。あれからどのくらいたったのか、時間もわからない。とにかく真暗。体もだんだん衰弱して行くのがわかる。ガタガタ寒けがする。立ち上る事さえ出来ない。やがて死ぬんだと思ったりする。誰か助けに来てはくれないか。と考えた瞬間、現れたのが、仏様だった。いや、消防隊だった。私には仏様に見えた。「地獄に仏」とはこのことか。とにかく多くの方々に迷惑をかけてしまった。ありがとう。

こどもたちが「証拠写真をとるのだ」と言って現場に行って写真をとって来たのを見せてくれたが、夜と昼では、こんなに違うのかと思った。昼は何の変哲もない山の景色だ。夜と昼では変わるものがいろいろあるが山の様子もその一ッだ。かくて私は低体温症、低血糖症、脱水症状で、入院の身である。

住職五十年

寶圓寺　鷹照　俊一

今年、住職五十年の表彰を頂きました。五十年間いろいろなことがありましたが、振り返ってみても長いとは思いません。心に留まっているのは人も事柄も昔のことばかりで最近のことはなにも心に残りません。

現在は、唯々「感謝」あるのみという心境です。家族に、師匠に、親族に、お近づきの御寺院に、檀家の皆さんに、近隣お付き合いをいただいた方々、あの人この人と援けを受けた多くの方々への感謝の念で一杯です。

昔の思い出話をひとつ。

第三・四教区に般若組寺という「ユイ組織」があり往来して般若会を修行しております。法要の最後の説教の布教師の香台係は、一番若輩が勤めるのが習わしでした。後輩がなかなかあらわれないので私が十年ほど続けるはめになりました。（勤めは夜間定時制）。故藤原正秀老師（四教区正眼寺住職・宗議・当時は三教区正乗寺住職）が某寺の般若会で布教師をお勤めになられた時でした。

『今日は般若心経をお勤めして、それから大般若経六百巻を転読し、各家の家運繁昌を祈念申しあげました。ところで、般若心経は二百六十余字ですが、そのなかに「空」という文字がいくつあると思いますか。色即是空空即是色の空です。』から始まって、参拝者を引きつけ一座の法話が終りました。

法衣を畳みながら「オイ、今日のオレの話わかったか」「ハイなんとなくそんな気になりました。」「そんな気になればいい。空なんどいくつでもいいんだ。聞いている時納得してくれればいいのだ。ありがたいは理屈ではないよ。」（若僧で理屈っぽい私はガツン）

若い時のそんな経験をベースにして「わからせる」布教でなく「感じてもらう」布教をと考えてきたがその方法もわからないまま五十年ということになりました。

残された日月は仏様のお住みになっている内外を少しでもきれいにしていきたいと願っています。

文化の断絶を憂う

林澤寺住職　青木　和雄

変化きわまりなき時代である。その変化は止まることを知らない。

今に、はじまったことではないにしても、特に「モノ」「コト」についての価値意識、判断、基準は、人により、考え方に、大きな差異があり、一様ではない。

かつて世の人は、何人も、同一の物差しで同質の価値意識を持ち、規律規範を含めて、常識的に行動を執って暮らしていた。そして旧い世代から若い世代へと、丁寧に引き継がれていた。

何時の世も、誰もが、人の履むべき道は、当然のこととして実践して来た。

職務上、檀信徒の法要、供養に接す機会が多くある。

具体的な事として――供養時の霊（供）膳の供え方についてであるが、食材の選び方をはじめとして、夫々の調理の仕方や盛り付けなど昔からキマッタこととして、世代間に継承され存続実践されて来た。

現在、それは、その通り、実践されているとは言いがたい場面に、しばしば遭遇する。

個人尊重の世相故か、旧世代が新世代に遠慮が働くのか、わからない。

意識の違い、価値観の相違だけでは済まされない。

時代が変わろうとも、いかなる時でも、当然履むべき道である。いわば醇風美俗であり、残していくべきである。

霊膳の作り方は、女性との係りが多く、上膳（供）については、昔から姑から嫁へと、しっかりと伝承されて来た。

その関係つながりが薄く、伝承が途絶えてしまったのか懸念している昨今である。

小衲は、自制し他に注意をかん起している。余談に亘るが、「霊膳」は、かつて高祖様が、中国から伝えられたものと、先にＮＨＫ（女）アナが報じてあった。

「びっくりポン」です

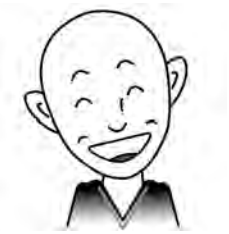
芝刈迷人

先日、ある梅花講の忘年会がありました。講長様と会長さんのご挨拶で、当梅花講は来年で二十五周年を迎えるとのことでした。ということは、私も二十四年間毎月通い続けた事になります。車で三十分夜六時半からの練習に車を走らせました。この間無事故、一回の違反（追い越し違反）です。もう二十四年にもなるのかと「びっくりポン」です。

講員さんは現在二十一人ですが、開講当初からの方が三人おられて、共に来年卒寿を迎えられるとのことでした。三人共に毎月欠かさず練習に出席されます。忘年会でも、歌うし踊るし益々元気で、これまた「びっくりポン」です。この講では十周年の節目に梅花奉詠旅行を企画され、大本山總持寺様をお参りして放光堂で思い切り梅花奉詠をさせて頂きました。以来五周年ごとに旅行が企画されて、十五周年では能登の祖院でのお唱え、十五周年では京都の清水寺の内陣でのお唱えをさせて頂きました。また森清範貫主様と久しくお話をさせて頂き感銘を深く致しました。そして来年の二十五周年の奉詠旅行は再び總持寺様でお唱えし、その後「銀ブラ」、「歌舞伎観劇」、「ルノアール展」の鑑賞と「ビックリぽん」の楽しみな企画をされておるようです。

ともあれこの梅花講が和気あいあいのうちにも長続きしているのは、異年齢で構成されているからだと思っています。六十代の会長さんを先頭に上の層は暖かく見守ります、若い層は信頼している、と非常にうまく連携がとれているように見えます。

来年の奉詠旅行を楽しみに、共に精進してゆきたいものです。



様変わりにびっくりぽん！

慈恩寺住職　宮本　康博

今年の新語・流行語大賞が発表され「爆買い」「トリプルスリー」であった。我々の世界にも「終活」「直葬」「家族葬」等、色々な言葉が誕生している。

終活サービスはカラフルで豪華になり、棺桶の中に入るなど日頃できない体験もある。

関東地方では、およそ5件に1件が直葬で家族葬の一部として捉えられ、僧侶はオプションというから驚く。県内に於いては、新聞のお悔み欄をみると、寺院・自宅葬でなくホール葬が非常に多いことと「葬儀終了」という告知が増えている状況にある。「訃報を知らせない」或いは「身内だけで行う」と便利で楽に営めると共に迷惑もかけず安くできるとして「家族葬」なるものが登場した。

更に全国版ＣＭで「喪中見舞」というお悔み方法が放映されている。家族葬が増加し、親しい人でも喪中はがきで初めて訃報を知る場合が急増し、後に弔意を託し品物を贈るという意味のようだ。葬儀業者からすると巨大ビジネスなのだろう。

葬儀は、自分の命の繋がりを確認する場であり、故人の生き様やお徳をしっかり受け止める大事な行持である。葬儀軽視は残念なことだ。昔は亡くなった人の旅支度をみんなで手掛け、大切な人を送り出さなければならないという思いが嘆き悲しみ涙を流す。そうした体験が人間の尊厳を確認し、人にも優しくなれるのだと思う。「無縁社会」という言葉も流行したが、縁という言葉は、そもそも佛教の言葉でこの世のすべての事柄がお互いに関わり合って、影響し合っているというお釈迦様が説かれた真理の中で最も重要な考え方である。

時代と共に変化する中で、秋田県が抱える超少子高齢化による人口問題は産業や消費に直結する。２０４０年には消滅する危機にあり、衰退は寺院の存亡にも……。

常に社会状勢を把握し対応できるように、佛教に携わる者として責任と覚悟をもって精進していきたいものである。

「安心して下さい　〇〇〇ますよ」と。

「夢中説夢」

高建寺住職　佐藤　成孝

平成27年ファイナルクォーターの日本は、ノーベル賞を受賞した二人の理学者と世界を驚かせたラグビー代表の活躍で沸いた。

なかでも理化学の大村教授が発見した土中の微生物、エバーメクチンから開発された抗寄生虫薬はアフリカ熱帯地方の感染症患者、毎年2億人ずつ延べ10億人以上を失明の危機から救ったとされる。実にスーパー快挙ともいえる今世紀の偉大な業績であるが、同教授は「この大きな功績を成し遂げた微生物に感謝したい」と述べて一身に集めた世界中の賞賛を一蹴した。さらに「地球上をはじめ宇宙には生きとし生けるものの幸福と福祉に寄与できる未発見の資源が無尽蔵にある」とも述べている。

翻って本県に眼を転ずるとき、景気低迷、人口減、少子高齢化、基幹産業の衰退・・・と明るい材料は乏しい。しかしダークサイドばかりを取り上げ愚痴ってみても展望は開けまい。美しい山河、豊饒な田園、山海の珍味、大らかで豊かな人情、児童生徒の全国トップクラスの学力、低い被災害率・・・といったブライトサイドも多い。

大都市に生活する経済最優先のストレス社会に疲れた若年層や定年退職者のUもしくはIターンの兆しも見え始めている。

由利本荘市のある企業は地域の耕作放棄地を借り、大学と連携してアケビの大規模栽培に乗り出した。種から抽出される油、果実、果皮、茎の加工食品化、薬用化の商品化により美容健康志向の時代ニーズに呼応したものである。地域振興と地元経済活性の先鞭モデルとして期待がかかる。

華厳では「一切衆生、如来の智慧徳相を具有せざることなし」と説かれ、法華では「貧窮無福慧の衆生なし」と説かれる。「一切衆生、悉有仏性」を微生物論によって世界に実証し、多くの人命を救い、無限の可能性を示唆した大村教授から学ぶものは多い。

線香一本

土屋　泰順

こうしたことを考えるのは決まって本堂の裏で香炉の灰をならしている時なのですが、一年に使う線香の本数は果たして総じて何本ほどになるのだろうかと思うことがあります。法要の際には迎え線香に導師の線香で計三本を立て、墓参では短いとはいえ一束まるごと火をつける方もいらっしゃいます。他にも含めれば恐らくは何十、何百という数に最終的にはなっているように思います。

私は朝のお勤めの際などはなるべく使いかけの線香を使用しておるのですが、困るのは灰の中で燃え残る指先ほどの欠片。香炉をならそうと思ってみれば、今まで立てた本数分の欠片が灰の中から出て参ります。その沢山の欠片を少し前ならばそのまま処分しておりましたが、ある日角香炉の灰が少ないことに気付き、余っていた灰を入れたところ、ほとんどの灰が入ってしまい、次はどうしようかと悩んだことがありました。その時ふと思いついたのが、香炭一つに火をつけ、沢山の線香の欠片の上に置いてみるということ。すると、次第に次第に火が線香に燃え移り、最後には一盛りの灰の山がそこに出来上がっておりました。

当山では遠州茶道の教室もやっており、灰はそこでも活躍いたします。私達が灰をならすのと同じように、茶道でも灰の形を懇切丁寧に、やはり独特なお道具を使って整えて参ります。その灰というのは、使い込み、茶を染みこませ、湿らせて、また使い込むということを繰り返して作られたまた独特な灰でございました。茶道の師範はこう仰います。茶道はきらびやかな様で実はこうした作業を繰り返していくものなんですよ、と。

線香が燃え尽きて灰になる。そして灰がまた次に立てられる線香を支える。それを私達が直していくというのは、実はとても尊い作業なのではないかなと、線香の煙る中灰をならしながら思える気がいたします。線香は最後まで使い切り、灰は丁寧に整える。新住職となったばかりの身ではありますが、こうした事を大切にして参りたいものです。

とは言うものの、これから迎える冬の季節。本堂裏の寒さとの格闘の中で、それを忘れずに勤められるかどうか。これからも精進して参りたいと思っております。

先祖は何処に

永泉寺住職　猪股　廣典

一年間で一番忙しい師走の時期に、宗務所からの原稿の依頼があった。所長・副所長の顔が思い浮かぶ。

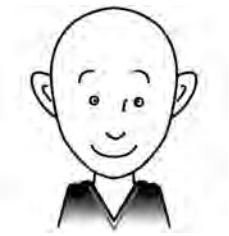
昨今のマスコミの話題は『夫婦別姓』である。今回は、〝合憲に違反しない〟との結論が出た。何れ近い将来『夫婦別姓』が認められるだろう。男女平等なのだから『女男』・『婦夫別姓』と呼ばれる時代も同時に来るだろう。

私は、『夫婦別姓』のニュースを聞いた時に、〝先祖の眠る墓はどうなるのか、先祖は何処に行くのか〟とふと思った。墓の正面に彫る姓はどうなるのだろうか。夫婦それぞれの両方の姓を彫るのだろうか。そうなると、今までの一方の姓だけの墓には納骨出来なくなるのだろうか。葬儀の形態はどうなるのか、色々な問題が提起されるだろう。同性の結婚も認められる時代もすぐそこに来ているのだ。

我々僧侶は社会の形態がどの様に変化しようとも、今日の自分がこの世に存在するのは、多くの先祖のお陰であるという認識だけは強く持ち続けていかなければならないし、檀信徒にも話していかなければならない。

スマホも使えず、パソコンを見ただけでアレルギーが出る多くの私と同世代、諸先輩の僧侶は、時代の流れの速さに必死に踏ん張り続けて、次の若い僧侶に、無事に『釈尊の教え』の尊さを繋いでいかなくてはならない。それが老年僧の大切な役目の一つとなる。

それにしても時代の流れは速すぎる。もう少しゆっくりとした流れの中で、先祖に感謝の念を持ちながらゆっくりと暮らしたいものである。



※当コーナーの掲載順は原稿到着順です。また、肩書きとご氏名は原稿に準じました。

平成27年度　第２回　布教師養成講座　ご案内

この講座は、布教師を目指し研鑽を積みたい方や日常の檀務等の法話について学びたい方を対象として行われております。

第２回めの今回は、宗門の布教教化の重鎮、中野東禅先生をお迎えし開催いたします。

そこで、せっかくの機会ですので、養成所受講生だけでなく多くの皆さんにご参加いただきたくご案内いたします。特に午後の講座は、ＮＨＫで放送された「良寛さん」について、先生が解説なさった内容を中心に一般の方々にも公開いたします。

開催日時　平成28年２月９日㈫
場　　所　秋田県宗務所・禅センター
講　　師　元曹洞宗総合研究センター講師　中野東禅先生
日　　程　10：15～12：30　講義
・宗教儀礼について
・マインドフルネス禅
13：30～15：30　公開講座
・良寛さんの生き方

※ご寺院様の参加申し込みは、別便にてお送りしたご案内に準じてお申し込みください。

秋田県宗務所ネット法話〈4〉

毎日続けることの大切さ～精進ということについて～

洞雲寺住職　柴田康裕

新聞の折り込みチラシや、雑誌に掲載されている広告などを見ておりますと、

「一週間でこんなに効果がありました。」

とか、

「一か月やっただけで、これだけの成果がありました。」

というような宣伝文句が、ことのほか大きな文字で掲載されていることがございます。

確かに、何かと忙しい毎日の生活の中で、特に「効率を上げる」ということが最優先される時代にあって、これらの謳い文句は、それなりに人を引き付ける魅力があるのかもしれません。

しかし、本当に大切なことは、何年も何年も時間をかけながら、徐々にその成果が表れてくるといったものであると思うのです。

例えば、曹洞宗の大本山・永平寺をお開きになられました道元禅師様の『普勧坐禅儀』という本の中に、

「坐禅は安楽の法門なり」

というお示しがございます。

曹洞宗の教えの根本は、「坐禅」でありますが、その坐禅は、私たちにとって、この上なく安らかで、楽しいものであるとおっしゃっておられます。

しかし、私は、このことがどうしても納得できませんでした。なぜなら、私にとりまして、坐禅は苦痛以外の何物でもなかったからです。

まず、足が痛いのです。もともと身体が堅いということも影響しているのかもしれませんが、まず右の足を左の腿の上に置き、次に左の足を右の腿の上に置くというように、両足を十字に組むというところからして、足が痛くなるのは当然であります。

また、身体が痛いのです。ただ座っているだけで、別に重労働を強いられているわけではありませんけれども、背筋を伸ばしてじっとしているというだけで、どういうわけか身体全体が痛くなるのです。

それから、坐禅を行じておりますと、猛烈な眠気に襲われます。何もしないで、ただ黙って座っているのですから、とにかく眠くなるのです。その眠気との戦いも、相当なものです。

ですから、坐禅の時間は、とにかく早く終わってほしいという気持ちでいっぱいでした。

このような坐禅が、どうして「安楽の法門（安らぎの教え）」であるのか。

私はある時、そのことを近隣のお寺のご住職様に尋ねてみま

した。そのご住職様は、毎日坐禅を行じておられる方でした。

すると、そのご住職様は、

「とにかく毎日坐禅を行じてみなさい。」

とだけ言われました。

苦痛以外の何物でもない坐禅を毎日行ずるというのは、とてもできそうもないことでありましたけれども、とにかくそのご住職様の言われるとおり、それから毎朝二十分だけ坐るようにしました。当然足も痛いし、身体も痛くなりましたが、とにかく毎日続けておりました。

すると、段々と毎日やらなければ気が済まないというようになって参りました。それはちょうど、毎朝歯を磨いて顔を洗わなければ気持ちが悪いというようなもので、何かの都合で坐禅を行じない時は、なんとなくすっきりしないというような気持になりました。

そうこうしているうちに、二十分だけでは物足りない、もう少し長い時間坐ってみようということで、倍の四十分間坐るようになりました。

こうして毎朝の坐禅を二十年ほど続けて参りましたが、最近になって、ようやく「坐禅は安楽の法門なり」という道元禅師様のお言葉が、実感として受け取ることができるようになってまいりました。

まだ足が痛い時もありますし、身体が痛い時もあります。もちろん眠い時もあります。妙に心がざわついて、落ち着かない時もあります。けれども、今の私にとって、坐禅はまさに「安楽の法門」なのです。

このように、「坐禅は安楽の法門なり」という教えを実感として受け取ることができるようになるまでには、実に二十年という長い時間がかかりました。

このことは、冒頭にお話し申し上げましたような、短期間にそれなりの効果や成果を上げるということとは、全く性格を異にするものであります。しかし、仏教の教えには、こうした地道な努力の積み重ねが非常に大切にされるのです。

それを「精進」と申します。普通「精進」という言葉を聞きますと、お肉やお魚を一切使わないで料理をする「精進料理」を思い浮かべる方もおられるかと思いますが、元々「精進」という言葉は、仏教の大切なみ教えの一つです。

お釈迦様は、

「一滴一滴の水がしたたり落ちて、やがてはその下にある石をも貫き通すようなものだ。」

という譬えを用いて、この「精進」というみ教えをお示しになっておられます。

但し、この場合の大切なポイントは、正しい指導者の下で、正しい方向性をしっかりと見つめながら精進を重ねていくということです。誤った指導者の下では、たとえ何年かかっても、無駄な努力で終わってしまう危険性があります。

世の中には、「効率を上げる」ということが最優先される事業があることも、歴然たる事実です。それはそれで大切なことでもあります。

だからと言って、拙速に成果を求めるあまり、その本質を見失ってしまったのでは、結局は、足をすくわれることにもなりかねません。

よき指導者の下、何年も時間をかけながら、地道な努力を怠ることなく続けていくという、そうした素直な生き方を通して、仏様のみ教えを親しくいただいて参りたいと思います。

トピックス

保護司表彰紹介

・全国保護司連盟理事長表彰
嵯峨　義房（男鹿保護区）
木村　高寛（能代保護区）

・東北地方更生保護委員会委員長表彰
亀谷　隆道（北秋田保護区）

・東北地方保護司連盟会長表彰
松山　祖隆（本荘保護区）

・秋田保護観察所長表彰
久米　弘道（湯沢保護区）

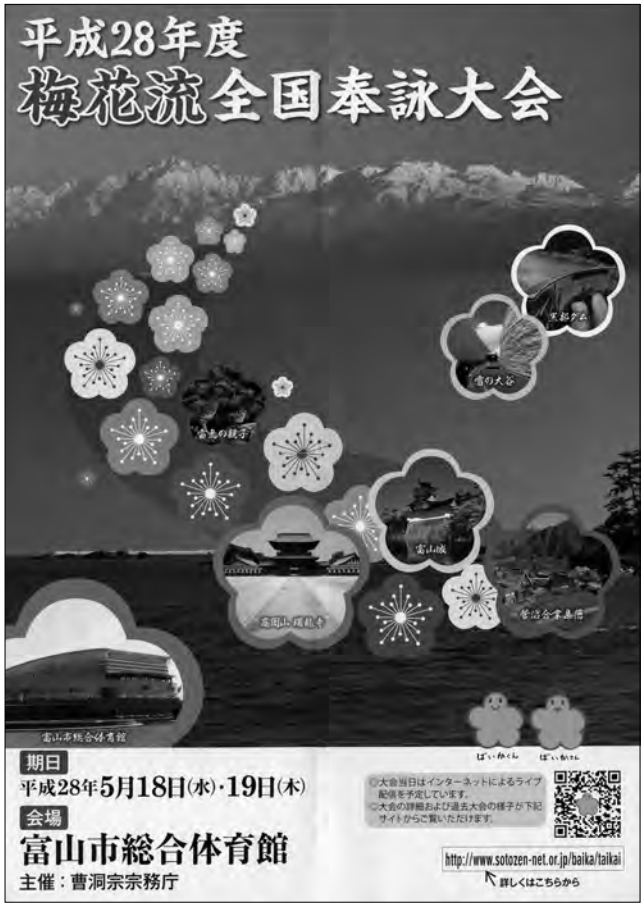
・秋田県保護司会連合会長表彰
國安　大智（横手保護区）
伊藤　昭人（角館保護区）
堀井　英和（角館保護区）

・秋田県知事感謝状
荻津　秀廣（横手保護区）

平成27年秋　藍綬褒章

調停委員功績
佐々木美喜子（7教区福城寺寺族）

皆様の御受賞にあたり、心からお祝い申し上げます。



布教師養成所　入所者募集

平成28年度の布教師養成所入所者を募集いたします。

— 期　日 —

第１期　平成28年６月20日(月)～６月24日(金)
第２期　平成28年10月24日(月)～10月28日(金)
第３期　平成29年２月13日(月)～２月17日(金)

— 会　場 —

曹洞宗宗務庁　５階　研修道場

— 受講資格 —

年齢65歳未満で令命２等布教師以上の布教師等級を有する者

— 留 意 点 —

檀務や私用での遅刻・早退・欠席・外出はできません。
総定員70名のため、入所できない場合もあります。

— 申し込み方法 —

曹洞宗秋田県宗務所に電話またはファックスでお知らせください。

ＴＥＬ（018)868－6871
ＦＡＸ（018)868－6872

— 申し込み締切り —

平成28年２月15日（厳守）

宗務所だより

◎梅花流指導者養成所（初級者コース）
九月三日

◎梅花流講習会
九月四日

◎写経会・仏教講座②
九月八日

◎梅花流指導者養成所（上級者コース）
九月十日

◎研修部講習会
九月十八日

◎梅花流検定会（県北地区）
九月十九日

◎宗務所寺族集会
十月一日

◎梅花流講習会
十月二日

◎梅花流指導者養成所（初級者コース）
十月五日

◎檀信徒本山研修会
十月八日～十一日

◎梅花流指導者養成所（上級者コース）
十月十四日

◎禅センター創立25周年記念式典・記念講演
十月三十日
秋田キャッスルホテル

◎梅花流指導者養成所（初級者コース）
十一月二日

◎仏教講座・野外研修
十一月五日

◎梅花流講習会
十一月六日

◎梅花流指導者養成所（上級者コース）
十一月九日

◎研修部研修会
十一月十一日

◎梅花検定会（中央・県南）
十一月十三日

◎梅花流講習会
十二月三日

◎写経会・仏教講座③
十二月四日

◎梅花流指導者養成所（初級者・上級者合同）
十二月九日

平成27年度 山門法要

日程	教区	寺院名	法要
4月17日～18日	第6教区	黄龍寺	本葬
5月3日	第9教区	長慶寺	二祖峨山禅師大遠忌法要
6月1日～2日	第16教区	松雲寺	本葬
6月5日～6日	第4教区	興昌寺	晋結
9月12日～13日	第10教区	正法院	晋結
10月3日～4日	第1教区	天徳寺	再会
10月17日～18日	第5教区	香積寺	晋結
10月24日～25日	第3教区	龍源寺	落慶・晋結

―平成28年度曹洞宗梅花流―
梅花流全国奉詠大会と佐渡島の旅

会　　場：富山市「富山市総合体育館」
大会期日：平成28年５月18日

平成28年度の梅花流全国奉詠大会は５月18日・19日の両日に渡って、
富山市「富山市総合体育館」にて行われます。
この勝縁に多数のご参加をお待ち申し上げます。

○期日：平成28年５月17日㈫～５月20日㈮…３泊４日

行程表

月日	行　　程　　（※オールバスです。）	食事
5／17㈫	6：00～7：30頃 各地 ═ 二ツ井白神ＩＣ ═ 秋田駅（東口）═ 象潟 ═ 酒田みなとＩＣ ═ 12：30頃　17：00頃 ═ 朝日まほろばＩＣ ═ 神林岩船港ＩＣ ═ 米山ＳＡ＝金太郎温泉泊 （和室利用）	× 昼 夕
5／18㈬	7：30　9：00頃　15：00頃 金太郎 ═ **平成28年度　梅花流全国奉詠大会** ═ 於：富山市「富山市総合体育館」 17：45頃 ═ 富山ＩＣ ═ 巻潟東ＩＣ ═ 岩室温泉泊 （和室利用）	朝 弁 夕
5／19㈭	7：45　9：25　11：45 岩室 ═ 新潟港 ～～ フェリー ～～ 両津港 ═ トキの森公園 ═ 18：00頃 ═ 佐渡歴史伝説館 ═ 佐渡金山 ═ 尖閣湾 ═ 佐渡島泊 （和室利用）	朝 昼 夕
5／20㈮	8：30　9：15　11：45 佐渡 ═ 両津港 ～～ フェリー ～～ 新潟港 ═ 聖籠新発田ＩＣ ═ 18：00～～20：30頃 ═ 朝日まほろばＩＣ ═ 酒田みなとＩＣ ═ 象潟 ═ 金浦ＩＣ ═ 各地	朝 昼 ×

※観光地予約時刻・道路事情等によりコース及び順序が変更になる場合もあります。

編集後記

今年の冬は、思いのほか暖かく12月中旬であるにもかかわらず秋田市内には雪は全く無く温かい日差しが窓から差し込んでいる。

数日前、秋田市内で生涯学習・社会教育関係の大会が開かれ、私も参加させていただいた。基調講演は、「学び・行動・協働が地域の元気を創る」という演題で香川大学教授の清國祐二氏であった。その中でいくつかのお話に感銘した。一つは秋田を元気にするキーになるようなお話であった。

今までの文化財行政は個々の遺産ごとに、いわば「点」として指定してきたが、これからは、地域に点在する有形・無形の文化財をパッケージ化し、我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」に認定する仕組みを新たに創設する取り組みを実現する。つまり、歴史的魅力に溢れた文化財群を地域主体で総合的に「面」として整備・活用し、世界に戦略的に発信することにより、地域の活性化を図る、というものであった。有形・無形の文化財にはそれぞれストーリーがあるという言葉には感銘した。

二つめは、ルイ・アラゴン（フランスの詩人）の言葉である。

教えるとは希望を語ること
学ぶとは誠実を胸に刻むこと

このことばは、１９４３年、ナチスの弾圧によりストラスブール大学の教授・学生が銃殺、逮捕されたことを痛み書かれた「ストラスブール大学の詩」の冒頭の言葉である。非常に重みのある言葉である。その事件の後、この大学は見事に復興を遂げたのである。

私たちは、子供たちに夢を語ることが大切であることをあらためて考えさせられた。私たちも夢と希望を語れる大人でありたいと心から思った。そして、いくつになっても誠実と真実を胸に刻み学び続けなければならないと感じた。

希望と誠実を語ったルイ・アラゴンの故郷フランスのパリで起きたテロは、多くの犠牲者を出した。いかなる理由があろうと、人命を奪う行為に大義はない。

（昭道記）

仏教講座・野外研修

平成27年11月５日

大龍寺（男鹿市）

自性院（潟上市）

祥雲寺（男鹿市）

秋田県宗務所・禅センター創立25周年

創立25周年記念式典

被表彰者の方々

越姓玄悦宗務所長の式辞

感謝状授与・佐々木正悦前所長

感謝状授与・清水忠道元所長

住職永年勤続表彰

寺族表彰の方々

被表彰者代表の謝辞

祝辞・亀谷健樹元宗務所長